

田中名誉教授のご退任を惜しむ

学 長 加 藤 寛

はじめて本学に赴任したとき、田中教授の側面しか知ることができなかった。自分の業績を昇格に足らざるものとして、あえて公表せず助教授から教授への昇格を延伸していることを知ったとき、その理由を立派なこととしか私には理解できなかった。またドイツ語を教えておられる先生という意識を持っていたが美術学が専門だとは気がつかなかった。また学生達に茶道を指導してくださっていることも後に知った。

茶道といえば、私も無縁のものではないが、戦国時代に花開いた茶道の心は、なかなか私には理解できなかったが、「利休の心」を読んだとき茶道の持っている合理主義的志向がいかにもすぐれた体系を作っているかを知った。彼は指摘した。「茶道の茶碗の拭き方、お茶の汲み方、どれ一つとっても二度と繰り返すことのできないそれ以外の作法が、すべて排除された合理主義である。」と。

田中教授は理数学から芸術に入ったようだ。そこにはおそらくカトリック的な芸術の世界が描かれていたに違いない。従って田中教授は常に現実の世界と非現実世界との差を乗り越えてしまうことが多かった。初めて教授会で彼女の質問を受けたとき、現実の世界なのか、想像の世界なのか、普段から実学に慣れていた私には答えようのない問題であった。しかし慣れというのは恐ろしいもので、何年か続けているうちに私の頭の中では、実学の世界と想像の世界とが二分され、しかも合理的に決着のつく問題となっていた。田中教授の学生に対する心遣いと想像の世界とをあくまでもひとつの合理的な解釈のうえに説明しようとする意欲は、論争しているうちに疲れてしまう問題ともなった。しかし田中教授は、私にとって少しも忌避する存在ではなく、むしろ同じ教育論を考える同士としか見えなくなっていた。田中教授がますます社会科学的な志向の強い本学をいかに現実と想像とを融合するものとして今後ともその基礎を作り上げてくれることを期待してやまない。

ちなみに矢内原伊作は、私の学友であった矢内原勝の実兄であり、若くして去ったが、若き頃の矢内原伊作は会った当初からリルケそのものであったことが忘れられない。その矢内原伊作を実存主義者としてジャコメッティが描いた絵をパリの近代美術館で見ると感動を覚えたことを記しておく。